

事や、茂吉と影響しあつた仲である事などと考えあわすと、「雀の卵」の始めまでは、万葉調であつたといえるのである。

以上が三人における統計表から得られた結果である。

## 「みだれ髪」の浪漫性

山 本 かつ恵

鳳晶子の名で出版された才一歌集「みだれ髪」は、その大部分が当時の「明星」に載つたもので、明治三十三年五月から三十四年八月（作者の満二十一才から二十二才）までの作品である。

その浪漫的開花は、「若菜集」から「落梅集」に至る藤村の自己抑制、内攻、つゝまじさ、純情などの情緒による人間の制約からの脱却によつてもたらされ、古風な人妻ぶりの世界を浪漫的な美的対象として助けようとする頽唐的嗜好さえ色濃くおびていたのである。そして「みだれ髪」は「明星」歌風を代表する傑作となつた。若干の欠点はあるにせよ溢れる青春の情思があるいは現実の世界に、あるいは空想の世界に、あるいは古典の世界に托して歌い、更には世俗に対する烈しい反逆精神が横溢し、在来の和歌と

いうきれいごとの觀念を一掃せしめた感がある。そこには青春の多感多情が大胆に、強烈な主観が牽直端的に歌われている。そして、その浪漫的調子の高さが、明治の歌壇において他の追隨を許さなかつた特色でもある。しかし、すべての感動を取捨てる所なしに歌おうとした結果は、一首の歌に余り多くの感情を盛ることとなり、晶子自身「後日に読むと作つた私自身にも解らないものさへある。」と告白している程、混乱と晦渋に陥つた一面のあることも事実である。

私にとつて「みだれ髪」の全短歌は得がたい深淵である。短歌の手法とするイメージの造型は全く個人的な深層でなされ、誰もそこを覗けないのだから、他人の作品を理解しようとする所にある無理が生じるのかもしれない。だが訴えようとする言葉の中にまばゆい美を感知し、魅きつけられるものを直感できたなら難解だろうとモダニズムだろうと、それで充分存在価値があり、歌われた事実は何らかの異和感を覚えたにしても、その内部に何かを考えさせ、その人を感じさせる意味を持つてゐるならば、短歌として大切な使命を果たしているのではなからうか。そういう意味でこの小論では晶子の一端を知る為、その代表歌集「みだれ髪」によることとし、内容ごとに六章に分かち、その浪漫性を考えてみることにした。

(一) 恋愛歌

(1) 歓喜

九 臙脂色は誰にかたらむ血のゆらぎ春のおもひのさかりの命

五 今ここにかへりみすればわがなさけ闇をおそれぬめし

ひに似たり

△9△は「鉄幹歌話」に「ゑんじ紫は晶子の造語で、それを愛の深刻な標色に用ひた。」とあるように青春の旺盛な活力を臙脂色と象徴し、△血のゆらぎ春のおもひのさかりの命△と大胆に結んでいるが、この直情燃えるような情熱と一閃な表現は、晶子が恋愛を実感するようになってから一段と強まり、晶子の命と一体になって分離することのできないものになつたと思われる。実際、晶子の恋愛歌は複雑な体験から出た人間記録ともいふべきものであり、△闇をおそれぬめし△のように烈しく、周囲を顧慮することなくひたむきであり、それが為に純真無垢であり、△春のおもひのさかりの命△という誇りをさえ持つてゐるのである。

(2) 懊惱

二〇 くる髪の手すじの髪のみだれ髪かつおもひかつおもひみだるゝ

二五 そのなさけかけますな君罪の子が狂ひのはてを見むと言ひたまへ

△罪の子△や△狂ひ△や△みだれ△の状態はこの歌集の著しい特色となつてゐるものであるが、これらの歌には裡深く痛めつけてゐるような苦悩の叫びは聞えない。むしろ誇張した言葉によつて恋の懊惱を表皮的に美化しており、浪漫性の方が先走つてゐる感じを受ける。女性の諦めと悩みを解決させる戦いとしてこれらの誇張も試みられたかと思われるが、確かにそこには人間性の解放があつたであろう。しかし、晶子の本質には浪漫的極致を求めようとするおもいがどの場合にもつきまとつていたのではあるまいか。

(3) 讚美

三六 かたちの子春の子血の子ほのほの子いまを自在の翹なからずや

三七 その酒の濃きあちはひを歌ふべき身なり君なり春のおもひ子

このように恋愛を秘すべきもの、うしろ暗いものゝように考へて怪しまなかつた世俗への反逆の宣言を示し、因習道徳が女性の感情生活を束縛することにおいて特に苛酷であつたからこそ、それを身にしてみても体験した作者の解放意識がかくも熾烈、熱狂的に歌われたのである。それは感情のみの解放であり、社会的基盤を欠いた自我の主張であつたにしても、当時のためらいがちな、遠慮深げな歌口と比較すれば晶子の成した事業の意義は大きく、それは歌壇に

とどまることなく、広く芸術全体に亘つた趣味革新の運動として重要視されるものである。

(二) 因習道德への反撥を歌つたもの

二十才過ぎまで旧い家庭の陰鬱と窮屈とを極めた空気の中にいじけながら育つたと晶子自身述べているように、実生活においては極度に抑圧されていたのである。そして、わずかに空想の世界にその自由を求めたのであるが、こうした晶子の空想に芸術的表現の道をつけたのが鉄幹であつた。

ところが一方、山川登美子の脱落(登美子は親の意志に従つて、一族の青年と意に満たぬ結婚をした)が封建道德に対する人間性の屈服という形でなされた為、この頃から晶子は、自我を解放する為に戦わねばならぬ当面の敵として家族制度を、更にその背後にあつてそれを支えている非論理的な封建的社会を明確に意識し始めたのである。

一九〇 星の子のあまりによわし袂あげて魔にも鬼にも勝たむと云へな

一九一 百合の花わざと魔の手に折らせおきて拾ひてだかむ神のころか

一九二 魔のまへに理想<sup>おぼく</sup>くださいしよわき子と友のゆふべをゆびさしますすな

などはいずれも山川登美子を詠んだ歌で、封建道德を指し

て「魔」Vと呼ぶに至つてゐる。このように登美子の敗北、鉄幹との恋愛を契機として家族制度と、それを支えている封建道德に対決し、これに打ち勝つ以外に自分の生きる道のないことを自覚したのである。登美子の不幸は晶子の自我を覚醒させる為の一つの犠牲であつたと言ふことができ

る。「みだれ髪」は難洪が表現と内容の落差を湿土として発生したものであることは又一般的な例外ではないとしても、やはりその難洪の性質そのものに作者独自の執拗にして強烈な生のおせりが表徴されている事実を見のがすことはできない。

時には非短歌的でさえあり、生硬でさえあつた数々の難洪な表現、だがそれこそ作者の内部生命のやまれぬあえぎだつたと思う。作品を難洪にするかに見せながら、作品周囲の空気を緊張させている中に、意外に現実的な作者の時代感動が加速度に波打つてくることにもそれは予想される。そこには晶子の芸術意欲がより激しく、リアリティ追求に迫力をかけ、女性としての素朴な人間的哀愴がより豊かに、より執拗に昇華されている。改めていうまでもないが、晶子は生活の実感を作歌における実感経験に密着させており、それはそのまま作者の生活のポーズでもあつたと思われる。

③ 自己に関するもの

(1) 自己陶醉

「明星」派短歌のもつとも大きい特色は「自我」を生かすことであつたが、その信条は単なる人間肯定を越え、個人的意欲、個性の尊重に徹底して個性即神というに似た所まで行つてゐる。人間の自信が反映して、神にかえて人間の力を信ずる程の自信に満ちた自己陶醉である。そこでは人間の持つ力の可能性が信じられ、人間個人が極端に理想化されるのである。

「みだれ髪」を一貫して流れてゐるものは、作者の異常な自己崇拜、自己陶醉である。

三 髪五尺ときなば水にやはらかき少女心は秘めて放たじ

六 その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくし

きかな

と黒髪を誇り、へおごりの春を謳歌するナルシズムは新詩社の歌風、特に晶子が開拓したものであり、

三六 罪おほき男こらせと肌きよく黒髪ながつくられし我

と大胆に、清新な言葉使いによつて自己を讚美するナルシズムを積極的に打ち出して、日本文学における新要素の一つを提供したのである。

「みだれ髪」に感情語の多いことは、改めて述べるまでもなく月うらみぢり、うつくしん、と、うここどよつきり

へうつくしと高らかに言い切る芸術的自由の自覚がある。そしてそれがごく自然に一首の主要素ともなつてゐるのである。

(2) 空想

「みだれ髪」には又空想の歌も多く、七三首をみる。

自ら宿の女となつて

一 翌夕ふるはなさけの雨よ旅の君ちか道とはで宿とりたま

へ

旅人の旅愁を歌つて

一四 春の日を恋に誰れ倚るしら壁ぞ憂きは旅の子藤たそが

るる

求愛の瞳を羊にたとえて

二六 そのわかき羊は誰に似たるぞの瞳の御色野は夕なりしとその夢想的、奔放性はおびただしいものであるが、晶子はその空想裡に種々雑多な人間を住ませて、その心情を育てることにより常に美しい永遠のしらべを奏でようとしたのではなからうか。

所詮歌は人間の肉奥から流露される感情の結晶であつて欲しいと思うので、晶子のくずされた形式、内容（詩的発想としての）へ冒険をおかしてイメージを表現した勇氣と努力、その壮烈な魂には心打たれるものがある。

この章では特に「自己に関するもの」と題して集めたのであるが、「みだれ髪」を一貫して流れる自我精神もこの

章の、どの歌にも明らかであることは又述べるまでもない。

このように自己を尊ぶ精神は作歌態度にも明らかであり、その精神は終生変わらなかつたと思われる。「自分が歌を作る態度」において「私の歌は私自身に終始してゐればそれでよいと思つてゐます。」と言ひ、更に「他から如何にほめて頂いても、私自身が見て不完全な歌だと思ふ限り、その讃辞は決して私を喜ばせません。又他から如何に侮蔑されても、私自身の満足する歌である限り、私はその非難を大して気に致しません。たとへて言へば私の歌は私ひとりが弾いて自ら聴き入つてゐる音楽です。」と言ひ切つてゐる。

晶子にとつて歌はことごとく自己告白であり、生きるという事も自己を知りつくそうとする欲望以外の何ものでもなかつたのではあるまいか。

晶子は生涯を、

一人のわれを貫き人の世と天とに通ずおもしろきかな  
という自我本位の生活に徹し、自己崇拜に安住して因習をも社会的禁忌をも顧慮するところなく全く純粹に自我を生き抜いたのである。

「みだれ髪」はこうした作者の自己告白の表出であつたが、その叫びは自己満足の気分止まつていて、内面追求への迫真的な激しさが薄く、表現そのものへの意欲の方が

まさり、ムードに終わつてゐることも否定できない点である。晶子が晩年、自ら「みだれ髪」の作品に対して忌避的感情を抱くようになった原因もあるいはここにあるのではないかと思われる。だからと言つて「みだれ髪」の価値はいささかも弱められない。そこには自己の行動、自己の魂そのものの個性に満ちた輝きがある。在るものがあるがまゝに受け入れ、自己の道を自己のペースで歩いている、そのこと自体が美しいし、眞実を歌い通したからこそ今なお青春の金字塔として短歌史の上にも輝いてゐるのである。

#### (四) 叙景歌

「みだれ髪」はその八割までが恋を歌ひ、空想を歌ひ、自己を歌つたものである。だが集中にはわずかではあるが単なる叙景歌とみられる歌も詠まれている。その一部

一六 清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

二三 裾たるる紫ひくき根なし雲牡丹が夢の眞昼しつけき  
など、晶子の数少ない叙景歌においても、平凡主義に満足しない奇想、奇調といった晶子特有の浪漫性を感じすることができる。

#### (五) 物語的结构

晶子が想像力の豊かなことは空想の歌が多いことを見て明らかである。この章も空想の歌であることに変わりはない。

ないが、ここでは特に物語的構成を施して作られたとみられる歌を集めてみた。

晶子は好んで宿駅の女と旅人とのかりそめの恋を設定している。

八四 水十里ゆふべの船をあたにやりて柳による子ぬかうつくしき(をとめ)

八五 旅の身の大河ひとつまどはむや徐かに日記の里の名けしぬ(旅びと)

こうした試みは人間関係を物語的構想として和歌の世界に導入した点にその意義を認めるべきものがある。

次に琴を人間にたとえた

二七六 そら鳴りの夜ごとのくせぞ狂ほしき汝よ小琴よ片袖かさむ(琴に)

二七七 ぬしえらばず胸にふれむの行く春の小琴とおぼせ肩やはき君(琴のいらへて)

の歌は万葉集にも同じ発想が見られ、晶子はその影響を受けたと思われる。

二八〇 伊可爾安良武日能等伎爾可母許恵之良武比等能比射乃倍和我摩久良可武

僕報ニ詩詠一曰

八二 許等波奴樹爾波安里等母宇流波之吉伎美我手奈礼能許等爾之安流倍志

(校本万葉集卷五)

万葉集においては題詞にもあるごとく、琴は娘子にたとえられていた。しかし「みだれ髪」の歌を見るに二七六の八片袖は男とも女とも考えられるが、二七七の八眉やはき君は女性とみる方が自然である、そこで佐竹氏の言われるように、「琴を若い男と見立て、そのそら鳴りを恋の得られぬ嘆息と空想している。」ものと取りたい。

こうした琴のたとえを取りあげても、単に趣味的に耽るというだけではなく、そこに強く現代人としての感情を打ちこもうとしている作者の新鮮ないぶきを感じることが出来る。

四 王朝趣味と西洋趣味の現われ

(1) 王朝趣味

「みだれ髪」中に王朝趣味の現われと思われる歌は十五首見える。先ず新古今的な歌風の名残りを留めているものとして、

言 たくまくらに髪の一とすぢきれし音を小琴と聞きし春の夜の夢

があげられ、更に平安朝の貴公子の通つてくるのを待つわび住居のかくし妻になつて、

三 春雨にぬれて君こし草の門おもはれ顔の海棠の夕

二 加ふし今明打はらうとうハト等具だりりり首まこ

など作者の描く平安朝の夢である。

(2) 西洋趣味

「明星」を通じての特色の一つは西洋的——大胆な擬人化、極端な連想感覚の飛躍である。「明星」派は努めて西歐近代の文学と美術（殊に絵画）とに接触しようとした。

「みだれ髪」も又そうした西洋趣味の濃い歌集であつて集中四十七首を見る。そこには西洋画式、自然觀照、又は西詩情調の影響と思われるものが極めて多い。

新体詩から受けた影響の痕跡と考えられる歌として、

三三 何となきただ一ひらの雲に見ぬみちびきさとし聖歌の  
にほひ

三六 花にそむきダビデの歌を誦せむにはあまりに若き我身

とぞ思ふ

西洋画趣味、西詩趣味と思われる歌として、

一四 とき髪を若枝にからむ風の西よ二尺足らぬうつくしき

虹

三二 金色の翅あるわらは躑躅くはへ小舟こぎくるうつくし

き川

などがあげられる。更に西洋趣味の四十七首中三十九首まで八神Vが歌いこまれているのも、晶子がいかにかこの当時の西詩趣味、洋画趣味の時代雰囲気を代弁しているかを語るものである。

そこで八神Vが詠みこまれている歌を見ていくと、あらゆる事物に、それを司る神を見るところというアニミズムが晶子の特徴的な考え方になつてゐる。

一六 今はゆかむさらばと云ひし夜の神の御裾さはりてわが

髪ぬれぬ

二四 夜の神の朝のり帰る羊とらへちさき枕のしたにかくさ

む

では夜を司る神、

一六 おもざしの似たるにまたもまどひけりたはぶれますよ

恋の神々

では恋を司る神を表象している。そして、時には人間自身が神となる。

三五 ふとそれより花に色なき春となりぬ疑ひの神まどはし

の神

では恋人の意である。

晶子の宗教心は芸術家としての憧がれの端的な表出であつたが、それは又恋愛を罪惡視する因習的な思想への反逆でもあつた。晶子にとつて神は喜怒哀樂を共にする超人間的なもので、それは晶子の尊い幻想の信念であり、又、現実と現実の彼岸とを結ぶ強力な詩的連関の絆でもあつたと考えられる。

以上見てきたように「みだれ髪」の浪漫性も「明星」全

般を通じてと同様に、浪漫的な自我が基礎となつて恍惚的にその解放を尊ぶ意味での感性美至上、芸術至上の主張であり、無限への憧がれであつた。

わたくしの分類表によれば三九九首中恋愛歌一四六首、自己に関するもの一三七首、王朝趣味と西洋趣味六二首、物語的構想二二首、叙景歌一首という順位を示している。この現象からみても「みだれ髪」は恋を歌い、自己を歌つた歌集といふことができよう。そしてそれらの歌には主観性、浪漫性が色濃く、生活体験も美化し、空想あるいは王朝時代の生活さえも現実化、芸術化しようと試みていたのである。

晶子自身「詩は感性の所産である」と主張しているように、それが全生命の燃焼に生き、赤裸々な人間性をそのまま、表白して縛られた感情、感覚の解放を要求した点には恋愛讃美のように積極性も感じられるが、又自然の情趣に酔う瞬時的なひらめきに終わつたとも考えられる。そこには若々しい情熱の積極性はあつても、冷静な知性への沈潜はまだなかつたのである。

詩歌における浪漫主義のたどつた道、それは感性美の陶醉、自我の真実の主張であつたとしても、空想の為の空想という意味が濃くなり、社会性も人生的な感動も失なわれつつあるのである。「みだれ髪」も又この範囲を逃れること

はできないであらう。